

平安京左京九条二坊十六町跡・御土居跡の調査

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(公財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



調査区全景（東から）

はじめに

2014年5月から9月にかけて、京都駅八条口から西へ約300mの場所でビル建設工事にともなう発掘調査を行いました。調査地は、平安京左京九条二坊十六町の北西部にあたり、安土桃山時代には御土居が存在していました。

今回の調査地について、平安時代の様子を記した文献史料は知られていませんが、本調査地周辺でこれまでに行なわれた発掘調査では、平安時代前期・後期、鎌倉時代の建物や井戸等を検出しています。

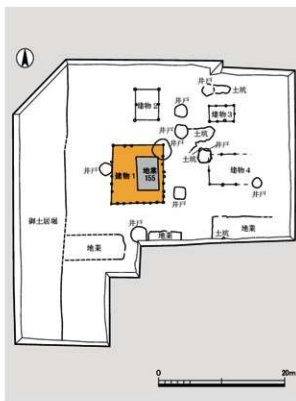
また、御土居の堀も確認されています。御土居は、天正19年(1591)に豊臣秀吉により造営された、京都の街を囲む土塁と堀です。総延長約22.5kmにも及ぶ御土居は、外敵の襲来や川の氾濫から京都の街を守るために築かれました。

平安時代～鎌倉時代

平安時代前期・中期の遺構はほとんど存在せず、当時の様子を窺うことはできませんでした。しかし、平安時代後期に大規模な整地を行なったことが確認でき、平安時代後期から鎌倉時代にかけての数多くの遺構を検出しました。



調査地位置図



遺構配置図



御土居の堀 (北から)

調査区の北側では、掘立柱建物、井戸、土坑を確認しました。土坑には、大量の土師器の皿や羽釜が捨てられていました。調査区の南側では、建物の基礎となる地業(じごう)の痕跡を確認しました。地業とは、地面を掘り込んで、土や礫で埋め戻して行なう地盤改良の方法です。調査地周辺は鴨川の扇状地であったため、整地や地盤改良を行わなければ建物を建てる事ができなかったでしょう。

調査区の中央では、建物の一部分のみに地業(じごう) (地業155)を行なった特殊な構造の建物を検出しました(建物1)。この建物は、建物の中央東寄りの南北5.2m、東西3.5mの範囲のみ地面を掘り込み、底面に拳大ほどの礫を敷き、その上に土を突き固めることで建物の基礎としていました。建物の中でも、重量物の置かれる範囲のみに地業

を施したと推測でき、邸宅内に築かれた持仏堂やクラであった可能性が考えられます。

室町時代以降は、遺構をほとんど確認できませんでした。

安土桃山時代～江戸時代

安土桃山時代になると、調査区の西側に御土居の堀が築かれました。今回の調査では、南北方向の堀の東肩のみを確認しました。堀の西肩は調査区外に位置します。また御土居の土塁は、堀の西側に存在したと推測されており、こちらも調査区外に位置します。今回検出した堀は幅7m以上、深さ約0.6mで、南北45m分を確認しました。堀からは、漆器の椀・箸等の木製品、染付や施軸陶器等が出土しました。洛外にあたる堀の東側では、耕作にともなう素掘小溝を多数検出しました。

御土居の堀は、少なくとも江戸

時代中期には埋まり始め、明治時代には完全に埋没したようです。

おわりに

今回の調査では、平安時代から明治時代にかけてのこの地の歴史の変遷をたどることができました。

とくに文献史料では様相の知られていなかった平安京左京九条二坊十六町が、平安時代後期に大規模な整地を行なうことで、邸宅として利用されたことが分かりました。

また御土居の堀も調査区の西側に築かれており、近世には、堀の外は田畑として利用されていたことが確認できました。

なお、現在、今回の発掘調査で出土した遺物の整理作業を進めており、遺構の詳細な時期や性格については、今後検討を進めていく予定です。

(松吉祐希)